

## 彙報

### 相愛大学総合研究センター研究プロジェクト活動報告

相愛大学総合研究センターでは、昨年度より学内の様々な分野の教員の専門的知識を活用し、また教員間の交流を活性化することを目的に、共同研究を発足した。その最初のプロジェクトとして、「日本における諸学問の近代史」と題された共同研究を行っている。同共同研究は、2014年度まで各年度5回の研究会を中心に進められる予定である。

「日本における諸学問の近代史」研究会は、日本近代における様々な学問領域の展開を、単なる学説史として整理するのではなく、学際的に再構成することを通じて日本近代の一断面を把握するとともに、学問が日本近代の社会において演じてきた役割を再検証することを目的にしている。同研究会は学内の教員を主要なメンバーとしているが、学外からも講師を招聘し、また学内外を問わず参加者を募り、開かれた共同研究として開催されている。その成果は、各年度末に公開講座において紹介し、さらに共同研究終了後にあらためて公刊する予定であるが、ここに第6回から第10回までの研究会の概要を報告する。各回の概要は以下の通りである。

#### 第6回

報告者：片岡尹（相愛大学人文学部教授）

テーマ：金・近代・国際通貨

日時：2013年5月22日（水）

午後5時～午後7時30分

場所：相愛大学6号館234号室

参加者：8名

片岡尹氏による報告は、まず幕末から明治初期における西洋的経済システムの受容について

整理したうえで、とりわけ貨幣制度をめぐる混乱状況を確認したうえで、西洋近代の貨幣制度の歴史を概観し、現代に至るまでの貨幣に関する理論から貨幣の本質に迫るという趣旨であった。その際、焦点とされたのは、貨幣の価値が何によって支えられているのかという問題をめぐる経済学の諸理論であり、金本位制から管理通貨制度、金・ドル本位制度、変動相場制へといった貨幣制度の変遷と国際政治・社会の変化とを関係づけながら、諸理論の妥当性が検証された。すなわち、貨幣制度の様態は国際政治・社会の様態と相関関係にあり、そのため貨幣制度と国際政治・社会は相互に規定しあうことになる。例えば、第二次世界大戦後の貨幣制度はアメリカの覇権体制と不可分の関係にあることになる。そして、この国際通貨としてのドルと国際秩序におけるアメリカの役割との関係性の問題は、今後の国際秩序とドルのあり方への問いとして展開された。

報告後には質疑応答が行われ、金本位制の政治的・経済的意義、為替制度と国際政治・第二次世界大戦との関係、これからの国際政治とドルとの関係などについて討議され、貨幣制度を軸とした経済学的観点から、これからの国際政治に関する展望を切り拓く可能性について確認された。

#### 第7回

報告者：鈴木徳男（相愛大学人文学部教授）

テーマ：ある国文学者の肖像——田中重太郎論

日時：2013年6月19日（水）

午後5時～午後7時30分

参加者：10名

鈴木徳男氏による報告は、枕草子研究で知られる田中重太郎（1917-1987年）の研究者としての経歴や研究手法に焦点をあてて、日本近代における日本古典文学研究の方法の確立と方法をめぐる論争から、同分野の研究史を明らかにするという趣旨であった。すなわち、芳賀矢一らによってドイツからとりいれられた文献学が、池田亀鑑らによって継承され、田中重太郎もまたこれを忠実に踏襲したが、原テキストの復元を目指すのみならず、研究対象とする時代の言葉の意味を、徹底した用例研究を通して明らかにすることを原理とする田中の研究手法は、やがて、主観的な解釈や創造的な解釈を肯定する萩谷朴らによって批判され、両者の間で論争が繰り返されることになる。この論争を踏まえつつ、報告は日本古典文学研究の目指すものに関する問いへと展開された。

報告後には質疑応答が行われ、テキストクリティークなど、受容されたドイツ文献学的方法と日本近世の国学的方法との関係、関東大震災を契機とする文献学的方法の変質、日本の文献学的方法と清朝考証学との相違、写本が一定程度残存している枕草子を研究対象とした田中重太郎の方法的特徴、田中への批判がもつ意味、それにもかかわらず田中の研究が後世に残した研究のもつ重要性などについて論議され、文学研究が近現代において辿った方法論をめぐる道程を再認識し、それぞれのもつ意義を再検証する必要性について確認された。

## 第8回

報告者：小野真（相愛大学人文学部准教授）

テーマ：近代化による雅楽界の変容

日時：2013年9月25日（水）

午後5時～午後7時30分

参加者：8名

小野真氏による報告は、大陸からの音楽受容に始まる雅楽の由来、朝廷による制度化、貴族や「楽人」と呼ばれる演奏者たちによる継承などといった雅楽の歴史を概観したうえで、明治維新や近代化とともに制度の改変を迫られ、その継承のあり方まで変容を被った雅楽界の近代、そして現在を問うという趣旨であった。律令制度の整備とともに制度化された雅楽界は、鎮護国家思想により仏教と深く結び付き発展を遂げ、平安時代後期には特定の氏族（家）を担い手とし、京都・奈良・大坂（四天王寺）を中心に、家（「楽家」）単位の分業が成立し継承された。ところが、明治維新は雅楽界に大きな打撃を加えることになる。すなわち、神仏分離により雅楽から仏教的要素が排除され、さらに東京への遷都により、雅楽界は東京と京都・奈良・大坂に引き裂かれ、また中央政府の管轄下に置かれたことにより、「楽家」の継承権が否定されることになったのである。加えて、音楽理論が確立されていた雅楽界は、西洋音楽受容の受け皿となり、活動領域を拡大する一方、千年に及ぶ雅楽界の歴史は音楽として、そして伝統文化としてのあり方を政治権力によって影響されることになったのである。

報告後には質疑応答が行われ、「楽家」の起源や身分上の位置づけ、継承権の問題、律令制度の形骸化とともに政治権力による宗教政策の一環で管理されたこと、明治期には家制度の再編とともに「楽家」を担い手とした雅楽界も変容を迫られた問題などが議論され、伝統文化が近代化とともに政治権力によって変質したプロセスを把握する必要性が確認された。

## 第9回

報告者：黒坂俊昭（相愛大学音楽学部教授）

テーマ：近代日本における「音楽」概念の変遷

日 時：2013年11月20日（水）

午後5時～午後7時30分

参加者：11名

黒坂俊昭氏による報告は、まず西洋における音楽の歴史、とりわけ近代における調性音楽の誕生とその美学的意味、また無調音楽の登場とその展開を確認したうえで、明治以降、日本において西洋の音楽理論がどのようにして受容されたのか、日本において音楽学がいつ頃確立されたのか、そして今後、音楽理論や音楽学がどのように進展しうるのかなどといった問題を論じる趣旨であった。西洋において音楽理論は、古代において神々の世界を模倣する技術、中世において神の創造を模倣する技術、近代において美を創造する活動、そして現代において快を追求する活動へと、基盤となる宗教の交代や世俗化、産業主義化といった社会の変化とともに内在的に変遷したのに対して、日本においては西洋の音楽理論は外在的要因、とりわけ政治的目的とともに受容され展開してきた。そのため、学的知として確立されるのも1950年代を待たなければならなかった。しかも、ようやく学的知として緒についた音楽学も、その美学的研究や史学的研究が本格化するや否や、音楽の技術的環境の変化に伴い、音楽そのものよりもその技術的条件へと関心を移すことになったのである。

報告後には質疑応答が行われ、音楽理論と音楽学概念上の相違、音楽学における美学的研究の特質、音楽研究と文学研究の親近性、音楽理論と政治との関係性、音楽のエピステモロジー（とりわけ哲学との同時代性）、現代音楽の傾向性と将来性などといった問題について議論され、日本における西洋の音楽理論の受容とその変容、特質などについて把握する必要性が確認された。

## 第10回

報告者：永藤清子（甲子園短期大学教授）

テーマ：家政と家政学——明治期の文献整理から

日 時：2013年12月2日（月）

午後5時～午後7時30分

参加者：14名

永藤清子氏による報告は、明治初期における「家政」概念の登場まで遡り、そこから「家政学」なる言説が編成され学問として普及し、明治末期から大正期にかけて政治的に利用されるまでの歴史を論じる趣旨であった。すなわち、西洋諸国の事情を紹介する明治初期の文献において「家政」という語が現われ、1880年代になると「家政」は家庭生活全般を指す語から家事を指す語へと限定的に使用されるようになり、文部省の女子中等教育の教科として位置づけられるようになる。それとともに、イギリスやドイツ、アメリカなど西洋諸国の家事の方法や女性としての行儀作法を紹介した女子教育教科書が出版され、それらを体系的に教育するために一つの学問分野として編成されるようになる。これが「家政学」の誕生である。つまり、西洋においては生活慣習であったものを摂取するために、日本においては学問として体系化されたのである。その際、「家政学」は家計、衛生、料理、裁縫、家庭教育、介護・看病、交際など、女性が家において果たすべき役割を列挙・細分化し、さらにそれらを女性の規範として課していく。それは民法などにおいて家制度が確立されるプロセスと連動したものと考えられる。さらに、日清・日露戦争後には、「家政学」が国力増強は家庭からとの観点から中流家庭の女性といえども内職を行うよう奨励することとなる。

報告後には質疑応答が行われ、「急務」とし

て「家政」が整備されたこと、日本的なものとしての「家政学」の特質、実践的知としての「家政学」の成功と女子教育機関との関連性などといった問題について議論され、「家政学」の歴史研究の必要性、とりわけ日本近代史にお

いて「家政学」が占める意味を認識する必要性が確認された。

(嘉戸一将)

相愛大学 主催

食と防災シンポジウム 2013

「備えてまっか〜！まさかの時の食」

シンポジウムを通して「食と防災」の視点から自助（個人）・共助（地域や大学など）・公助（行政）の必要性の理解を深めるとともに、それぞれの立場で日頃の備えを見直し具体的な取り組みが実践できるように、大阪府民、食の専門家ならびに大学生を対象に企画した。大学は共助の立場からも広く地域との連携・支援を考えていくことが重要であり、今回のシンポジウムは昨年度に引き続き2回目の実施となる。東日本大震災の被災地での支援活動等を取り上げるとともに、今年度は本学人間発達学部発達栄養学科による展示発表も行った。

300名の募集に対し、当日の参加者数は534名で昨年度（438名）の1.2倍となり、「シンポジウム等の継続を望む」（H24年度アンケート結果より）ことを裏付ける開催となった。相愛学園本町学舎講堂で実施される「食と防災シンポジウム」が地域との連携・支援活動の一環となりつつあると考えられる。その概要について報告する。

#### 1. 開催時期（日時）

平成25年9月9日（月）  
13時20分～16時20分

#### 2. 開催場所

相愛学園本町学舎 講堂

#### 3. 参加者数

534名（H24年度 438名）

#### 4. 参加者の概要

一般府民、食生活改善推進員、大阪府・市町

村等行政栄養士、学生、食品企業等関係者など

#### 5. 主催

相愛大学、大阪府、農林水産省近畿農政局大阪地域センター、大阪青山大学

#### 6. 後援

（社）大阪府栄養士会、大阪府食生活改善推進連絡協議会、健康おおさか21・食育推進企業団

#### 7. 協賛

大塚製薬株式会社大阪支店、株式会社宮源

#### 8. 開催内容

開会挨拶

大阪府健康医療部保健医療室副理事兼健康づくり課長 撫井 賀代 氏

第一部：シンポジウム（80分）

・講演Ⅰ「大規模災害における消火活動」

大阪市消防局警防部訓練担当課長

住田 徹 氏

・講演Ⅱ

「食物アレルギーの正しい知識と関わり方」  
大阪府立病院機構大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター小児科医長

高岡 有理 氏

第二部：パネルディスカッション（80分）

「忘れていませんか、自分の非常食」

・プレゼンテーションⅠ

「日常食から非常食を」

相愛大学客員教授、農林水産技術会議委員 坂本 廣子 氏

・プレゼンテーションⅡ

「被災地における栄養弱者の状況と対応」  
（独）国立病院機構 京都都病院診療部  
内科栄養管理室室長 松井 欣也 氏

【パネリスト】

坂本 廣子 氏、松井 欣也 氏、高岡 有理 氏

【コメンテーター】

大阪青山大学教授 藤原 政嘉 氏  
 ((社)大阪府栄養士会会長)

【コーディネーター】

相愛大学人間発達学部教授 太田 美穂  
 (相愛大学総合研究センター運営委員)

閉会挨拶

農林水産省近畿農政局大阪地域センター長 小野 哲士 氏  
 司会進行：大阪府茨木保健所企画調整課課 佐補佐 西本 香代子 氏

9. 展示コーナー (12:30~16:20)

①「府内特定給食施設における災害時の備え」 大阪府保健所栄養士

②「見てわかる実践台所防災」「防災おやつについて」

相愛大学客員教授 坂本 廣子 氏  
 協力：リマ株式会社

③「大阪産(もん)の紹介」

大阪府環境農林水産部

④「(社)大阪府栄養士会賛助会員による非常食展示」 (株)大和商会

⑤「若い仲間に伝えたい!食と防災」

相愛大学人間発達学部発達栄養学科

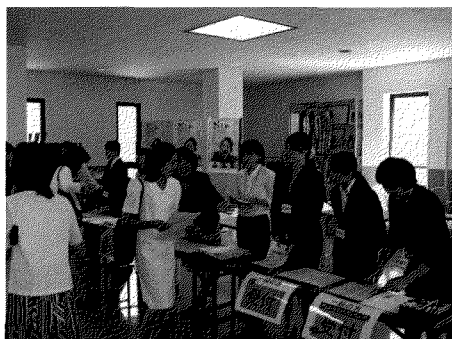
10. 会場の設営、アンケートの実施

当日の会場設営、受付、後片付けなどに相愛大学人間発達学部発達栄養学科の学生がボランティアとして協力した。

・なお、入場時にアンケートを配布し終了後、アンケートを回収した。(回収率 72.2% 386名)

《当日の様子》

シンポジウム会場の受付風景



学生がボランティアとして協力した。

第1部 シンポジウム

講演Ⅰ

「大規模災害における消火活動」

大阪市消防局警防部訓練担当課長

住田 徹 氏



東日本大震災の被災地への活動について時系列を追って解説された。【会場の声】大災害時の消防の流れや救助の事がよくわかった。

講演Ⅱ

「食物アレルギーの正しい知識と関わり方」

大阪府立病院機構 大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター小児科医長

高岡 有理 氏



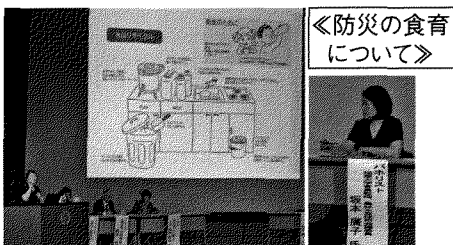
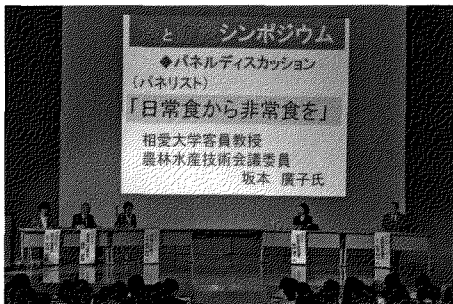
食物アレルギーの基礎知識から避難所での関わり方など、医師ならではのアドバイスを含めてわかりやすく解説された。【会場の声】災害時に安全に食べものを口にする困難さに気づいた。

## 第2部 パネルディスカッション (80分)

「忘れていませんか、自分の非常食」

### I 「日常食から非常食を」

相愛大学客員教授 農林水産技術会議委員  
坂本 廣子 氏

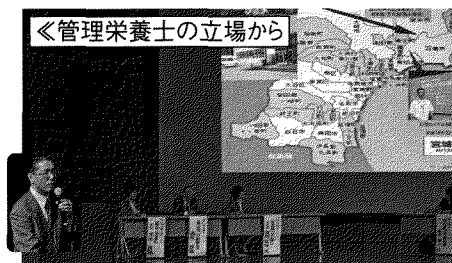


日常食から非常食にどうつなげるのか、イラストを交えて紹介され、会場からも高い関心が寄せられた。

【会場の声】現状を客観的に考えるよい機会になった。実習先でも役立つと思った。すぐに実行したい。

### II 「被災地における栄養弱者の状況と対応」

(独) 国立病院機構 南京都病院診療部内  
科栄養管理室室長 松井 欣也 氏



病院給食の管理運営という立場も含めて非常時にどのように備えているのか、さらに今後の課題は何かなど解説していただきました。【会場の声】非常食調理は大変勉強になった。管理栄養士を目指す学生に知ってほしい内容であった。

### 《パネルディスカッション 会場の声にこたえて》



(向かって 左：藤原政嘉氏、右：高岡有理氏)

【展示会場の様子】



《見てわかる実践台所防災 by 坂本廣子氏》



【会場の声】身近なものが大変役立つ事がわかりやすかった。手にとって確かめる事ができ納得した。

《支援活動紹介パネル by 大阪府保健所栄養士》



【会場の声】自分の職場の参考になる、活用したい。

《大阪産（もん）の紹介 by 大阪府環境農林水産部》



【会場の声】流通ルートが分かりやすく、パンフレットが充実していた。

《非常食の展示 by 大阪府栄養士会賛助会員》



【会場の声】最新の非常食が参考になった。

《若い仲間に伝えたい！食と防災 by 相愛大学人間発達学部発達栄養学科》



【会場の声】子どもや孫に備えておきたいものを伝えたい。大学生の意識を理解しやすい内容だった。



【今後のシンポジウム企画への要望】 (一部紹介)

- ・シンポジウムは毎年継続してほしい。
- ・地域で起こる災害について取り上げてほしい。
- ・対象別(年齢別)の特定給食施設での対策法について取り上げてほしい。
- ・介護と防災について取り上げてほしい。
- ・アレルギーだけでなく、高血圧や糖尿病の適切な対応を知りたい。
- ・具体的な防災時の非常食の実際を知りたい。
- ・体験型(作り方など)の企画を考えてほしい。
- ・野外での活動や救急法も取り上げてほしい。
- ・備蓄しているものを使い切る工夫など。
- ・府や市の備蓄品がどのように配布されるのかシステムを知りたい。
- ・災害経験者からのコメントも聞きたい。

【広報用チラシ】

近畿農政局大阪地域センター消費・安全グループへFAXでお申し込みください。

**FAX 06-6941-9011** 締め切り9月5日(木)

氏名(お名前)	住所(〒 市区)	電話番号

※入場料・参加費は無料です。お申し込みの際は、お申し込みの住所を必ずお知らせください。お申し込みの住所が大阪府外の場合は、お申し込みの住所を必ずお知らせください。

【シンポジウム実行委員】

- 相愛大学人間発達学部発達栄養学科
- 水野浄子 (副学長)、宮谷秀一 (教授)
  - 太田美穂 (教授)、多門隆子 (教授)
  - 竹山育子 (准教授)、堀野成代 (助手)
  - 松井麻侑 (助手)
- ・大阪青山大学健康科学部
    - 藤原政嘉 (教授・(社)大阪栄養士会会長)
  - ・大阪府健康医療部保健医療寮健康づくり課
    - 大西智美 (栄養総括主査)
  - ・大阪府茨木保健所企画調整課
    - 西本香代子 (課長補佐)
  - ・大阪府環境農林水産部農政室推進課
    - 岩本容子 (主査)
  - ・農林水産省近畿農政局大阪地域センター
    - 北川治郎右衛門 (主任農林畜産安全管理官)
    - 森本素子 (農林畜産安全管理官)

(文責 総合研究センター運営委員 太田美穂)

相愛大学 総合研究センター後援

唐衣裳装束の着装を通して  
平安時代の文化を探る

子ども発達学科の「文化と社会」の授業の一部として、本学所蔵の唐衣裳装束の着装を通して平安時代の文化を探る授業を行っている。

今年度は相愛大学 総合研究センターの後援を受け、本学受講者並びに学外者を対象に公開授業を企画・実施したので、その概要を報告する。

#### 1. 開催日時

平成 26 年 1 月 25 日（土）13 時 20 分～15 時

#### 2. 開催場所

相愛大学南港学舎 5-402 教室

#### 3. 参加者

本学学生 30 名

学外者 22 名（事前申し込み 24 名）

#### 4. 内容

本学学生をモデルとして、堀口洋子・木村吉美両氏による唐衣裳装束の着装を見学しながら、川中が装束並びにそれらを着装していた人々の美意識や生活などについて解説を行った。その後、装束を体感する時間を設けると女子学生だけでなく男子学生や学外者も装束に袖を通し、その重さを実感した。また、学外者からは学生からは無いような質問が出るなど、有意義な授業となった。

